



お江戸舟遊び瓦版 1144 (2) 号

水彩都市江東 こころ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり
お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

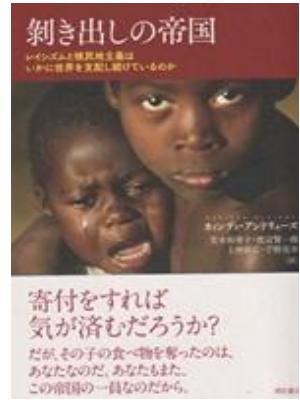
カインディ・アンドリューズ「剥き出しの帝国 (2)」明石書店 25.9.5

第4章 植民地主義

- 今日、植民地主義が機能しているとことを見たければ、バーミンガムのキャドバリー・ワールドのキャドバリー社で、グローバルな巨大企業で、全世界で4.5万人を雇用し、チョコ製品等を作っている。展示室に入るとアステカ文明が出迎え、チョコレート物語を学び、見学ツアーの終わりには革新的な取組を紹介、米合衆国国家を歌う。キャドバリー社は2010年にアメリカ企業に買収されている。キャドバリー社はフェアトレードを謳っているが、公平な取引等というのではなく。
- 19世紀末までにアフリカ大陸のほぼ全域が植民地支配下に置かれた。西洋の企業が植民地の資源を搾取することで巨万の富を得ることを繰り返してきた。ベルギー国王がコンゴで一千万人殺害しているが、主なヨーロッパ諸国は、植民地支配を強化するために無数の人々を殺した。
- インドはイギリスの最大の植民地だが、イギリスは積極的にこの地の産業力を奪った。15世紀ヨーロッパは暗黒の時代を脱する途上で東洋に遅れていた。イギリスはインドを暴力で服従させることで資源を絞り続けたのだ。1901年インド大臣の給与は9万人のインド人の生きるための必要収入と同額だった。それがイギリスの植民地主義の真の残酷さを示している。
- 新世アメリカのイギリスからの脱却で、イギリスはアメリカとの貿易は増加し、奴隸制度が廃止されると、自分たちが道徳的に優れているという思いに酔いしれ、アメリカの奴隸農場で作られた製品を輸入することに幸せを感じていた。
- アメリカは入植植民地であると同時に、植民地勢力であり続けてきた。そして今なおそうである。ペルトリコ、フィリピン、ハワイ、ハイチ、ドミニカ、グアム、サモアがアメリカの植民地だった。アメリカで解放された数百万もの元奴隸は国内で自由にされると問題が生じると考え、1847年にリベリアに送られた。アメリカがリベリアを前哨基地として利用しているのは、アメリカ植民地主義外交政策の一側面だ。アメリカは世界中で権力を強固にするために世界70ヶ国以上に800以上の軍事基地を置いている。アフリカも例外ではない。
- アメリカ帝国主義の根幹は、世界専属の警察部隊として振りかざす力である。2003年のイラク侵攻は、21世紀のハードパワーによる新植民地主義的な表現が露骨に顕現した。資本主義は、コロンブスの航海から奴隸所有会社、植民地企業、ヘッジファンドに至るまで、彼らの私利私欲が腹いっぱいになるように国家がテーブルを用意しているから続いているのだ。

第5章 新時代の夜明け

- 第2次世界大戦後、ヨーロッパ諸国の対立によって何百万もの命が失われ、各帝国の中心は破壊に追い込まれ、ヨーロッパ列強は植民地を直接管理、維持する資源を最早持っていない。両世界大戦は掛け合なしに地球規模の戦争であり、先住民たちは現状に不満を抱いていた。第5回パンアフリカ会議が1945年にマンチェスターで開催され、ヨーロッパの支配からの完全な独立を要求することを宣言した。
- 1918年ドイツが敗戦した時、植民地は連合国間で分配された。このことがナチズムの、人種差別的なナショナリズムの出現をもたらす国民的な不満の主要な原因となった。それ故、より持続可能な枠組みが必要とされ、1920年に国際連盟が設立された。アメリカが孤立主義を捨て、世界の舞台で役割を果たすと決断し、今日まで続いている。



- ・ 日本の真珠湾攻撃がアメリカを第2次世界大戦に引き込み、その以前にチャーチルとルーズベルトが大西洋憲章で、ナチスを打ち破った後の世界の統治の原則を取り決めた。
- ・ 1944年に後にIMF、世界銀行、世界貿易機関となる種がブレトン・ウッズ会議で植えられ、世界金融を支配する体制を作り上げた。イギリスとアメリカが会議自体、国際機関を牛耳り、世界秩序を作り変えた。本部はワシントンに置かれた。アメリカの支配は戦争の数年間でヨーロッパは破産し、消耗しており、アメリカは上昇気流に乗っていたためだ。
- ・ IMFは1947年に操業開始し、主目的は借款を提供し、西洋諸国の経済安定をさせ、各国の協調を促進することだった。世界銀行は極度の貧困をなくすことを目指し、低開発国がソビエトの魅力に惑わされないよう彼らを支援することを目的に設立された。

第6章 非白人の西洋

- ・ 2018年、トランプは中国に対する貿易戦争を開始し、不均衡な貿易で毎年中国に失われる「数十億ドル」について言葉汚く罵った。民間企業に命令する力が自分にあると信じていることは、グローバル資本と自身の役割について甚だしく誤解している表れだ。中国が今や世界の工場であり、製品の製造で先頭に立っていること、トランプ当選の大きな理由は、アメリカのラストベルト、製造業が海外に移転したことで住民が損失した中西部の州で勝利したためだ。
- ・ 中国とアフリカの繋がりは少なくとも紀元前202年漢王朝まで遡る。西洋諸国が資源を略奪する一方、中国はアフリカが切実に必要とする道路、ダム、ビル、鉄道建設に奔走するだけでなく、製造業にも投資してきた。中国は友人だとアフリカでは見られている。

第7章 帝国民主主義

- ・ 過去に起きた2度の産業革命により人類は滅亡の危機に晒されたという。18世紀のイギリスの発明の才による産業発展、都市化、技術を生み出した。20世紀初頭には電気、石油、モーターエンジンの開発を基にアメリカが第2次産業革命の支点となった。第3次産業革命は「モノのインターネット」へのデジタル変革に基づいており世界を一変させる可能性を開いている。太陽光発電コストは急速に低下しており、化石燃料よりも安くなるだろう。
- ・ しかし、気候変動は低開発国にも壊滅的なダメージを与え、異常気象は何百万人もの気候難民を生み出している。世界中の活動家たちが抗議しているが、子供達や若者の主導する気候変動ストライキ運動が注目される。
- ・ 2019年ダボス会議の世界経済フォーラムで税金を納めていない億万長者らが批判された。
- ・ マルクスの失敗は、「産業プロレタリアートが資本主義の英雄であると思い込み、その物語を正当化するような歴史をでっち上げた」ことである。製造業の衰退がトランプの当選に影響したが、驚異的な速さで人間の労働に代わっているのがロボットと人工知能である。しかし、テクノロジーは、常に人々を自由にするためだけではなく、抑圧するためにも用いられてきた。
- ・ 豊かな土地にいる幸運な私たちは社会民主主義の価値観に戻ることで恩恵を受けるだろう。

第8章 鶏はねぐらに帰ってくる

- ・ 西洋が非西洋世界に導入するよう押し付けた財政・金融政策が、今やねぐらに帰って来た。ひとたび国民国家が帝国を纏める中心性を失って企業が何の制約も受けずに自由に金儲けできるようになれば、新自由主義勢力がドアを打ち破ろうとする。社会民主主義は荒廃した西側諸国の再建にはなくてはならないものだった。
- ・ 過剰消費が地球を滅ぼすのだ。金に糸目をつけずに成長を求めるだけ、滅亡の淵に立って初めて西洋、文明が問題の根深さと進歩という幻想を捨てることができるのだ。革命が導こうが自重で崩壊に向かおうが、西洋はいずれ崩壊する。

マルコム X 「投票か銃弾か、自由か死か、皆に自由があるのか、誰にも自由はないのか」

所感：トランプ・アメリカがベネズエラに侵攻した。まさに本書の「剥き出しの帝国」ではないか。本書の一部しか記せていない、是非本書を直接手に取って頂ければ幸いである。 (文責 中瀬)
(参考) 本書の翻訳に深川東京モダン館・渡辺賢一郎氏が分担されている。